

浅田次郎

冬の星座

2013年

7月6日(土) 16時開演

(開場は30分前)

7月7日(日) 13時開演

(開場は30分前)

会場 一心寺シアター倶楽



菊池寛+井上ひさし
唐黒の壺

冬の星座

木枯とだえて	さゆる空より
地上に降りしく	奇しき光よ
ものみないこえる	しじまの中に
きらめき揺れつつ	星座はめぐる
ほのぼの明かりて	流るる銀河
オリオン舞い立ち	スバルはさざめく
無窮をゆびさす	北斗の針と
きらめき揺れつつ	星座はめぐる

朗読 GEN 劇団員募集中

ぜひ、稽古場見学にいっしょにしませんか。
毎週水曜日18時半から21時
ムーブファクトリーにて
(JR天満駅より徒歩10分・地下鉄中崎町駅より徒歩3分)

朗読教室ご案内

～奈良学園前・楽しい朗読教室～
レッスンは 第 2、4 火曜日 10時から/11時半から
近鉄学園前駅北口から歩5分。サンライト文化教室
にて無料体験、教室見学あり。
お気軽にお越しください。

■ 12月1日(日) 発表会予定
於：ギャラリーGM-1 (近鉄学園前徒歩5分)

■ どちらもまずはお問い合わせください。

TEL&FAX / 0742-48-8688 (秋山)
メール / akikan@m4.kcn.ne.jp
またはホームページ / <http://r-gen.jimdo.com>
(朗読GENで検索できます)

いあいさび

このパンフレットの原稿を書くために、いつもながらうんうん唸りながら、資料を読み漁っていましたが、ふと、浅田次郎と菊池寛と井上ひさしの作品には何か、共通点があるんじゃないか、と気づいたので。

人生には数々の不幸がある、死のうと思うことだつて一度や二度はあるかもしれない、菊池寛のように、嘘のように助け舟が現れるなんてことはないかもしれないが、その時、死なずにいれば、フシギに生きていられるものかもしれません。

「冬の星座」に登場する宅配便の男が亡くなったキヨフにもらったことは「元気の次は勇氣だよ」。現実が厳しくても、落ち込んでもらえない、お腹はすくし、眠くもなる、欲も出て、人の裏もかく、そんな人間を愛しいものとして小説の中に登場させる3人の素敵な作家に今年も出会いました。そして、夜空に響くハーモニーと演奏でラストシーンを美しく彩って下さる特別出演の皆さん、スタッフの助けを得て、出演者一同力いっぱい頑張ります。

最後まで楽しんで見てくだされば幸いです。

演出 秋山 太加

唐黒の壺

原作／菊池 寛＋井上ひさし
「唐黒の壺」
菊池 寛「女強盗」

上演台本
演 出 秋山 太加

■キャスト

筑後の前司…… 田 中 章 恵
五郎丸……… 太 田 淑 子
小次郎……… 福 嶋 左 知 子
荒太郎……… M I Y A
実は女盗賊
藤原親任…… 坂 田 昌 子
馬買い
前司の妻・語り 秋 山 太 加

冬の星座

原作／浅田 次郎
「冬の星座」

上演台本
演 出 秋山 太加

■キャスト

北村雅子……… 秋 山 太 加
医学部学生
太田……… 福 嶋 左 知 子
友部医師
宅配便運転手 田 中 章 恵
(関口キヨノの声)
友部の妻・尼僧 太 田 淑 子
尼僧・暴走族 坂 田 昌 子
暴走族……… M I Y A

■特別出演

ハーモニック・シンガーズ
角 村 佳 代 子
広 庭 さ つ き
「冬の星座」編曲、ヴィオラ・ダ・ガンバ演奏
田 淵 宏 幸

■スタッフ

音 響……… 西 角 秀 紀
(榎ムーブファクトリー)
照 明……… 牟 田 耕 一 郎
(劇団ママコア)
舞台監督……… 佐 野 泰 宏
ヘア・メイク……… 五 十 嵐 公 子
(日本メイクアップアーティスト学院)
衣裳製作……… 青 柳 秀 子
宣伝デザイン…… 桂 瑞 子
ヘア・メイク……… 井 上 三 友 紀

山 本 侑 菜
堀 明 日 香

「冬の星座」・雅子
歌唱指導 米 田 有 紀 子
(傍の会音楽教室)

記 録……… 小 島 知 光
制 作……… 丹 原 祐 子
(office P-T企画)
音 楽 選 曲……… 秋 山 太 加
協 力……… 田 中 仁 美
亀 井 恵 子

稽古場協力 (榎ムーブファクトリー)
企画協力……… 文 藝 春 秋
印 刷……… 宣 光 社
企 画・製 作 朗 読 劇 団・朗 読 GEN

■プロフィール

ハーモニック・シンガーズ
1997年に発足した本格的な
ヴォーカル・アンサンブル。
古楽を主に、小編成ならではの
精緻な演奏を目指している。
2002年フェニックスホールに
おける「フェニックス・エヴォリュ
ーション26」に選出された。

角村 佳代子 (ソプラノ)
ルネサンス、バロック音楽を中
心に合唱団やアンサンブルで
活動中。
ハーモニック・シンガーズ代表。
「京都バッハ合唱団」団員。
宇田川貞夫氏を講師に「Sem-
inarium Musicum. Ohozaca」
を主宰。

広庭 さつき (メゾソプラノ)
学生時代よりバロック、ルネッ
サンス時代の音楽に傾倒。
声楽を松村富也氏に師事。
「京都バッハ合唱団」団員と
しても活動している。

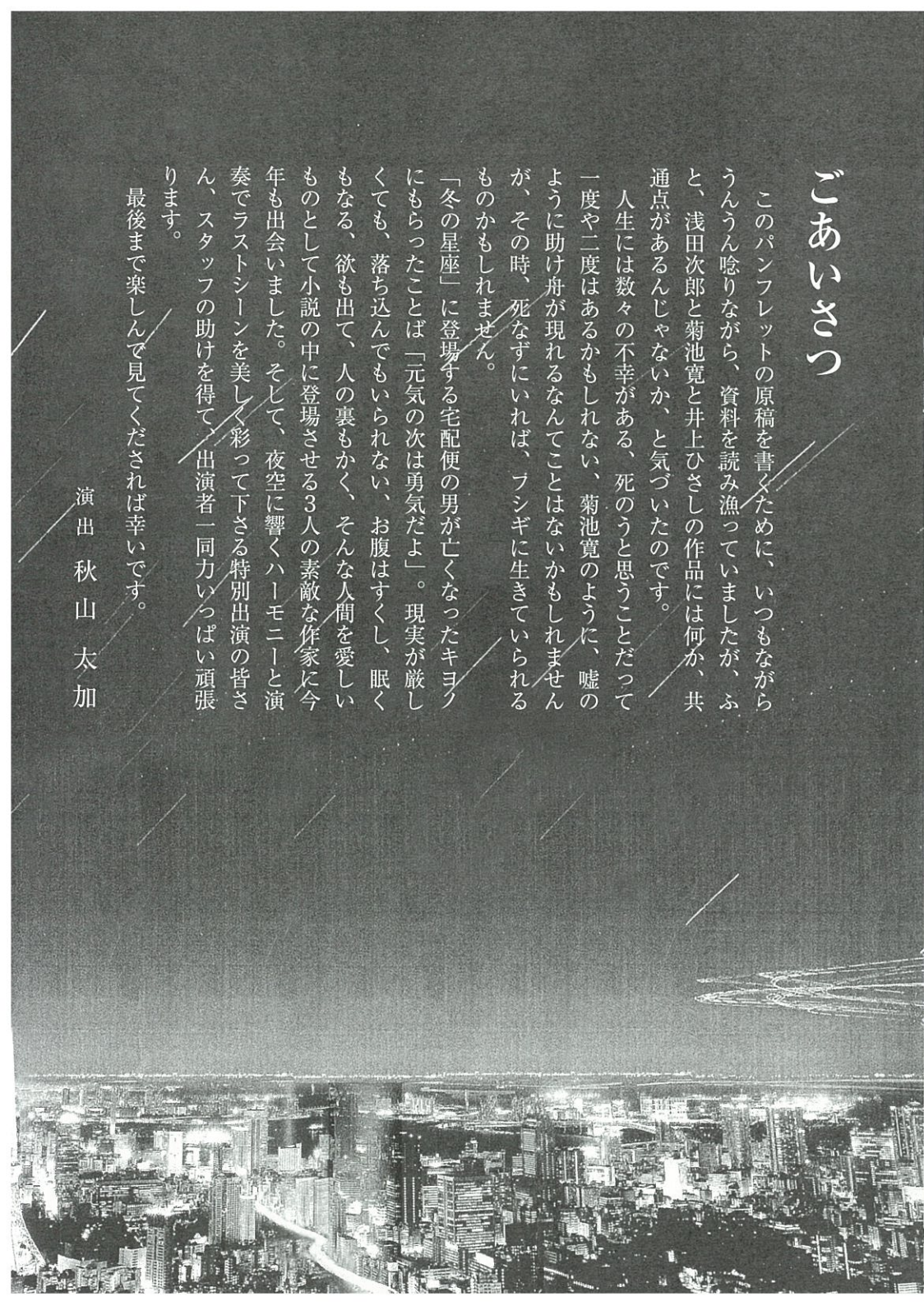
田淵 宏幸
〔「冬の星座」編曲、
ヴィオラ・ダ・ガンバ演奏〕
京都市立芸術大学及びイタリア
ヴィチエンツァ国立大学卒業。
ヴィオラ・ダ・ガンバをパオロパン
ドルフォ氏、バロックバイオリンを
寺神戸亮氏に師事。
2005年イタリアに留学。2012
年に帰国、The Bukky Com-
panyを主宰。演奏会活動や作
曲コンクールでも受賞するなど
活躍中。
今年の活動予定
folklore全曲演奏会
10月25日 於：ノワアコルデ
(阪急服部)

■プロフィール

MIY A
フリーで活動中。養成所のレ
ッスンで演じることの楽しさ
に目覚め、今では芝居から離
れられなくなり、年に1、2回い
ろいろな劇団の様々なジャンルの
舞台に出演している。日々、
勉強がモットー。

坂田 昌子

おしゃべり集団「チームソラミ
ミ」のメンバー。インターネット
での朗読配信を中心に、声を使
った様々な活動をしている。
今年の定期公演「おしゃべりラ
イブ」は10月19日に開催予定。



「唐黒の壺」

先覚者——菊池寛

自然主義文学が主流の時代に、読者を意識したエンターテインメントな小説を作り出したのが菊池寛である。現在に続く大衆小説の始まりである。「読者があって初めて小説は完成する。読者に届いてこそ作品である」と菊池寛は考えていた。紆余曲折の末、京都帝大に入学して教えを受けたのは上田敏。(訳詩集『海潮音』有名)この人が「文学というのは作者と読者の共同作業である」というのである。これはじつはイギリスの文学雑誌に載っていた論文の受け売りだったのだが、敬愛する教授の言葉に大いに感動した菊池はますますその感を強くする。

新しい読者層

明治時代には夏目漱石の小説でも出版部数が2000部位だった。本を読む人はとても少なかったのだ。大正時代になると、工業生産が伸び、重工業が盛んになって工場勤めの人が増加、そして私立大学、専門学校が多くできて、卒業生が働き始め、サラリーマン階級が生まれる。この忙しい人たちが自然主義のような現実離れした個人のグズグズとした悩みを書いたような小説よりも、日々の疲れや悩みを読んでいる間は忘れさせてくれる面白い小説を読みたいと思うのは当然である。

大正9年に新聞に連載された「真珠夫人」はこの要求にぴったり合い爆発的に読まれた。一つのわかりやすいテーマを持った彼の小説は様々な展開のあと必ず明るく締めくくられる。読者はそれによって癒され、励まされるのだ。

危機に現れる助け舟

貧乏な子供時代から、菊池の前半生は井上ひさしが書くように「『そのうちなんとかなるだろう』の連続だった」のである。高松中学に入った時、学資が続くか危ぶまれたが、共に通っていた次兄が放縦な行動で退学となり彼は学業をつづけてもいいことになった。上級学校への進学も諦めていた頃、東京高等師範学校の制度変更があり授業料不要になったため入学。しかし授業を怠けて除名。すると、伯母の結婚した相手が養父となって学資を出すと言い出し、明治大学法学部に入学。だがここも、文学を志して退学、これが養父に知れ、絶縁される。ところが今度は父が借金をして学資を送金してくれた。そこで一高に入学。その時同級となった芥川より既に4歳年上となっていた。

さてこれで終わりと思いきや、盗品と知らずに頼まれてマントを質屋に持って行き疑われて退学処分を受ける。なんとそこで現れたのは同級の友人の父親、結局京都帝大に進むことができるようになる。さてまだまだこの先、菊池の幸運は続くのだが・・・「このように幸運な体験をした人間が、自作の結末を暗いまままで終わらせるなどとうていできない相談というものである」と井上ひさしが書いている。

【解説】

この小説は執筆中急逝した菊池寛の絶筆となった作品に、生誕100年を記念して依頼をうけた井上ひさしが後を継いで完成させたものである。今回の上演では、物語の最後に菊池寛作「女強盗」の1編を付け加えた。平安時代のお話だが、随所に現代に通じるテーマが感じられる。

あらすじ

筑後の前司、源忠理が、鞍馬寺へ詣でることになったが、方角が悪いからと方違いをすることにし、以前に自分が使っていた厩番の男のところへ泊めもらった。夜中ごろ、前司の部屋のすぐ傍の松垣に何者かが寄り添ってくる。ひそかに話を聴いていると、小次郎という名が出てきて、前司はびっくりする。小次郎とは常陸の国から女を追って出てきた若者で、門前に倒れていたのを介抱して使用人として雇い入れたのだが……

<注> 筑後：今の福岡県の南部
常陸：今の茨城県

自然主義文学は西欧に興った文学運動で「現実と人間をありのままに描くこと」をよしとした。日本では社会の暗黒部分ではなく作家個人の実生活で、特に現実の醜悪な部分を取り上げた。それは私小説につながり、代表的作家に島崎藤村、田山花袋がいる。

メモ



菊池寛略年表

年号	西暦	事項
明治21	1888	12月26日香川県高松市に生まれる。家は代々高松藩の儒学者。
32	1899	高等小学校入学。家が貧しく友人の教科書を借りて写した。
36	1903	県立高松中学入学。紅葉、露伴など小説を耽読。習作を書き始める。
39	1906	高松の図書館の蔵書を読破。英語が得意で辞書を全暗記。
41	1908	中学を首席で卒業。東京高等師範学校へ入学。
42	1909	放縦不羈を理由に高師を除籍。地元の素封家に見込まれ、支援を受け明大法学部に入学的も3ヶ月で退学。
43	1910	早稲田大に籍を置き西鶴に傾倒。9月一高に入学。同級に芥川がいた。
大正2	1913	友人の窃盗の罪を着て退学。友人、成瀬正一の実家から援助あり、京都帝大に入学。
5	1916	帝大卒業。時事新報社に入社。
6	1917	「父帰る」発表。高松藩士の娘と結婚。
8	1919	芥川の尽力で大阪毎日新聞社の客員となる。
9	1920	この頃多くの小説、戯曲発表。劇作家協会を組織。
12	1923	文藝春秋社を創設。「文藝春秋」創刊。
15	1926	文芸家協会結成。
昭和2	1927	芥川没。友人代表として弔辞を読む。
3	1928	社会民主党より請われ選挙に出馬、落選。文藝春秋社を株式会社にする。
10	1935	芥川賞、直木賞を制定。第1回は石川達三(芥川賞)、川口松太郎(直木賞)
13	1938	日華事変、文士部隊結成、中国を視察。
14	1939	南京、徐州視察。文藝銃後運動始める。
18	1944	大映社長となり国策映画を作り、講演活動は樺太から台湾まで回った。
21	1946	「文藝春秋」復刊。しかし、預金封鎖、新円切り替えで資材難に陥り、文藝春秋社解散。
22	1947	公職追放の指令を受ける。
23	1948	前年に親友の横光利一を亡くし、氣力が萎えていた寛は3月6日狭心症で急死。享年60歳

【参考資料】「菊池寛の仕事」 ネスコ・文藝春秋
「菊池寛・話の屑籠と半自叙伝」 文藝春秋
「ちくま文学の森・悪いやつ物語」 筑摩書房
「月島慕情」 文春文庫
「ひとは情熱がなければ生きていけない」
「勇氣凛々ルリの色」 講談社文庫

「冬の星座」—心の物語の名手—

浅田 次郎

生粹の江戸っ子

1951年(昭和26年)東京都中野区生まれ。祖父は1897年(明治30)生まれ。譜代関宿藩御馬廻役三百石であった。立派な侍大将であるが、武家階級は明治維新以後急速な没落をしたので祖父の兄弟は養子に出されたり、奉公に出たりした。

祖父はきわめて享樂的な、能天気な人物であったとか、そして父は大正13年の生まれ。関東大震災の焼け跡に生まれ、第2次世界大戦に出征し、焼け跡に戻って、食料難の時代を生き抜いて働き続ける世代である。

そして、祖父と父からいつも「お前は馬鹿だから」と言われ育った次郎少年、学校の勉強がではなく「苦勞知らずの軽薄なやつ」という意味だったのだろうと浅田次郎が書いている。

おしゃれと見栄っ張り

浅田次郎の道楽の全てはこの祖父と父の影響をまろにかぶったと思われる。祖父はすぐ近くの煙草屋にいくときも髭と髪の手入れをし、よそ行きの服に着替える人であり、日本橋に生まれて、向島の鉄火芸者だった祖母は、蕎麦屋だろうが、デパートの食堂だろうが、口に合わないと思ったとたん「出るよ」と席を立ったとか。

「江戸っ子の心意気を受け継いだ私は、経済的にも人付き合いの上でも、どのくらい損をしたかわからない」と書く。

つとに知られる風呂好きはこれこそ祖父母の

遺伝。潔癖症だった祖父母は内湯があったにも関わらず、銭湯に行った。真冬の凍える晩には行くのを拒んで「横着するんじゃない」と叱られた次郎少年は長じてジャグジーとシャワールームを家に備えているにも関わらず、週に2、3回は健康ランドに通う風呂好きとなった。

父母は映画スターのように

後年売れっ子作家になって、イタリアに旅した時の白いズボンにブルーのジャケットを着て颯爽と歩く姿、そして巨頭に合うボルサリーノのパナマを買う抱腹絶倒の顛末をエッセイで読めば、いかにおしゃれが大好きかがわかる。粹でおしゃれな祖父と父の血は確かに受け継がれたのだ。父は東京の月島生まれ。短編集「月島慕情」に『冬の星座』は入っている。

父の通夜の晩にトイレで「私と行き会った老人が用を足しながらよろめいたほどよく似ている」と書く。

父は白い麻の背広を着て、^{つば}鑿が得も言われぬ美しい曲線を描くパナマを冠っており、母は瑤瑤のような半裸で大鏡に向かい、化粧を終えて藍色の絹の着物を着てレースのパラソルを物憂げに回している、というようなまるで銀幕のスクリーンの中にしかいない人間だった。



そして、次郎少年10歳の夏、二人は破産した家に彼を置き去りにして、あろうことか「各個に」失踪した。その後苦心惨憺の末作家になった浅田次郎は「私に物語を書かせている動力は、口に来ぬ恨みつらみのほかに、彼らのダンディズムに対する憧れなのであろう」と書くのである。

どうしても小説家になりたかった

話によると、10歳頃から、「小説家になる」と宣言して一度もその思い変わらずついに45歳で第117回直木賞をとるに至る。

いい短編が広く読まれる時代は文学にとって幸福な時代である。もちろん社会にとっても。と、浅田次郎は思っている。

「私から小説を取り上げたら、骨のかけらすら残らない、ならばせめて骨のかけらを拾い集めたような短編集を作ろう」直木賞受賞作『鉄道員』はその結実である。私たちは、今きらきら光るいくつもの骨のかけらをしゃぶるように浅田次郎の作品を読んでいる。

あらすじ

暮れも押し迫った夕刻、医学部助教授、北村雅子は突然、育ての親とも言うべき関口キヨノの死を知らされる。

キヨノは雅子の祖母の妹で、その娘は友部という開業医と結婚していた。教え子の太田の父と、若い頃恋愛関係にあった雅子は皮肉なことにクリスマスの夜にかつての恋人の息子と、疎遠になっていた友部夫婦を訪ねることになった。

浅田次郎の自作解説より

「私、自分の娘が医者をやってましてね。解剖実習のときに吐いたり倒れたり、拒食症になるのはきまって男子学生なんだそうです。・・・私も子どものころに自分の家がなくなってしましまして遠縁のおばさんに育てられたんですが、このお婆さん、92歳で往生したんですけども実に素晴らしいお婆あちゃんでありましてね。・・・この小説のモデルになっています。・・・何か大切なことを伝えてくれたという記憶はないんですけども「無窮をゆびさす、北斗の針」というこの詞の一節というのは・・・多摩川の河原に立って、

私の未来を示唆してくれたんじゃないかと・・・」

